国語教育専修，中国古典作品選読
担当教員：太田　亨

学生の漢詩理解について

国語教育専修・太田亨

１．授業の概観

本授業の目的は、漢詩という中国文化を日本がどのように受容したかについて、作品を丁寧に分析・読解することによって、古の両者の文化交流のあり方を見つめ直すことである。これは国語における漢文の意義にも直結している。国語における漢文は、中国の古典ではなく、日本の古典を意味するからである。

上記の目的を達するために、学生には次に挙げる四つの到達目標を課した。

①日中の工具書の使い方を理解する。
②中国の注釈書の注解を読解することができる。
③日本古典の注釈書の注解を読解することができる。
④作品を深く読解し、作者の真意を理解することができる。

これらの到達目標を実現させるために、授業では教材として『三体詩』を扱った。『三体詩』は杜甫と李白を除く唐代の著名な詩人が詠んだ詩の総集である。詩の構成法に主眼を置いて配列され、作詩における指南書でもあり、日本においても非常に親しまれてきた書である。一首について、日本中世に作られた注釈書を丁寧に読解して解釈を導き出す作業を行わせた。

作業は､割り振られた漢詩作品とその注解について、辞書を利用して丹念に読解し、最後に漢詩を日本語訳するというものである。そして、行った作業を資料として配付して全員の前で発表する。その後、グループ毎に資料と発表について討論し､疑問点や意見を言い、よりよい解釈を導き出していくようにした。

２．授業評価法

授業評価については、授業後に学生がこの授業を受けて何を感じ、何を考えていたのかを知るためのアンケートを行い、それをもとにして分析する。マーク式のアンケートは以下の通りである。

①、シラバスの説明（授業の概要）はありましたか。（１あった　２なかった）
②、授業における教員の態度（言動や学生に対する対応等）は適切でしたか。（１大変適切だった　２まあまあ適切だった　３ふつう　４あまり適切ではなかった　５全く適切ではなかった）
③､この授業に対する教員の熱意は感じられましたか。（１よく感じられた　２まあまあ感じられた　３ふつう　４あまり感じなかった　５全く感じなかった）
④、授業には興味を持って臨むことができましたか。（１臨むことができた　２まあまあできた　３ふつう　４あまりできなかった　５全然できなかった）
⑤、発表資料の作成・課題作成を含めて、授業外の学習をどれほどしましたか。（１かなりした　２まあまあした　３ふつう　４あまりしなかった　５全くしなかった）
⑥、グループ討論にどのように参加しましたか。（１積極的に参加した　２まあまあ参加した　３ふつう　４あまり参加しなかった　５全く参加しなかった）
⑦、授業後、漢詩の理解は深まりましたか。（１かなり理解できた　２まあまあ理解できた　３ふつう　４あまり理解できなかった　５全く理解できなかった）
⑧、漢文に対する興味は深まりましたか。（１　深まった　２少し深まった　３深まらなかった）

自由筆記のアンケートは以下の通りである。

⑨、漢詩全般について、あなたが考えたこと・思ったことを自由に書いてください。
⑩、昔の日本人の漢詩解釈についてどのように思いましたか。
⑪、漢文について、あなたが今思っていること、考えていることを自由に書いてください。
⑫、授業に対するあなたの意見・感想を自由に書いてください。

３．授業評価結果

この結果を見ると次のようになる。

評価	１	２	３	４	５
①、	25人	0人			
②、	10人	10人	4人	1人	0人
③、	16人	6人	3人	0人	0人
④、	9人	9人	7人	0人	0人
⑤、	13人	9人	2人	1人	0人
⑥、	10人	6人	6人	3人	0人
⑦、	1人	17人	4人	3人	0人
⑧、	9人	14人	2人		

⑨について以下のような回答があった。（抜粋）

・読む人で解釈の仕方が違い、面白かった。
・日本語の言葉の繊細さが漢詩を日本語訳するときに難しくするなと思った。
・単語の意味だけでなく、時代背景や作者の置かれていた状況を知ることで、様々な見方を知ることができ楽しかったです。中学や高校で漢詩を勉強する時に是非利用したいと思います。
・単純に漢字の意味通りに訳をしただけでは読み切ったことにならないところが面白い。
・訳の取り方も色々できて、注釈を見ないと分からないと思うことが多々あった。研究の仕方によっていろいろあると思った。
・漢詩は高校で勉強した時は背景等が分からなかった

が、この授業で背景を詳しく知ることができ、当時の人たちと共感できる部分があると思った。
・日本語に訳する時に微妙なニュアンスで訳が違ってしまうのは面白い。色を表す漢字など、目で見ても凄く、和歌とはだいぶ違うと思った。
・漢字から想像するという楽しみができた。
⑩について以下のような回答があった。（抜粋）
・余談が多かったり、少し強引に解釈していたり、昔の人も色々悩んだんだと思った。
・中国人とは違った当時の日本の様子や中国に対する憧れなど、昔の日本人の様子を知ることができ、人間味があって面白かったです。
・様々な文献を引用しているが、かなり自由な部分もあり、視野が広いと思った。ただし、私たちがそれにとらわれる必要もないと思った。
・中国の人よりも日本人の方が漢字一字にこだわっていると思った。助詞が一字変わるだけで文の意味が違ってくるところが今と変わらないと思った。
・昔の人の方が今の日本人よりも熱心だったのかと思います。今の日本人には漢詩に学ぶ姿勢が欠けていると思います。
⑪について以下のような回答があった。（抜粋）
・日本語訳の難しさを感じた。漢文解釈の多様性を知った。ただ訳すだけでは面白いと感じなかったと思う。様々な視点から詩を読みとることや、基礎知識を持って推理することはとても面白い。
・まだ取っつきにくく難しい。
・人間社会を理解するのに非常に役立つと思います。講談社文庫の『論語』を購入しました。渋沢栄一も論語を絶賛しているので楽しみです。
・漢文は短い言葉の中に伝えたい思いを表しているので凄いと思いました。また、背景を知ることで解釈が面白くなると思いました。
・難しい。高校で習った文法を覚えておかないと訳しにくいと思いました。
・漢字の意味や書き下し方によって随分受ける感じが違うのは日本人だからだろう。
・楽しい。けど調べていく内に分からなくなるのが大変です。ただ大変なのも楽しいです。
・日本人ならではの訳、昔の人ならではの訳、現代人ならではの訳があると思いました。
・今回の授業では、素隠の書き下しのおかげで解釈できたが、白文だと手も足も出ないと思う。訓点を付けることでその人の主観が出てくると思いました。
⑫について以下のような回答があった。（抜粋）
・大変だったが、議論が白熱して楽しかった。解けた快感がいい。
・とても難しい内容で付いていくのが大変でしたが、先生や他の学生のサポートで最後までやることができました。この授業を受けて、知識の他に非常に得ることがありました。
・国際理解コースの学生にだけ課題が簡単すぎると思いました。
・自分達で作業をすることで積極的に授業に取り組めて良かった。語句調べは苦労したが、それを活かして文章化した時は達成感があった。
・自分たちで調べたことによって内容に入りやすかった上、少し漢文に慣れたように感じました。グループ活動が多かったため、楽しくできました。
・各人がしっかり解釈を以て話し合うと広がりがあって楽しかったです。自分の課題を一生懸命やることで漢文に身近さを感じ、時間をかけた分だけ愛着のようなものが湧きました。

４．まとめ

マーク式のアンケートでは、教員の対応や授業の進行については、あまり不満は見られなかったと言える。ただし、授業後の漢詩に対する理解度については、若干の学生があまり理解できなかったことを挙げている。

⑨では、漢詩には背景があること、詩句にはその背景踏まえた意味が込められていること、漢字には様々な意味があること、それを訳するに当たっては日本語訳が大変難しいこと、等がよく見られた感想である。こちらが漢詩を読解するに当たって感じてほしい感想を述べている。

⑩では、大凡の学生が、昔の日本人が中国の文学を吸収するため、様々な資料を利用して読解していたこと、一字を詳しく分析していたこと、深く追究するあまり、時には穿鑿府会のものまであったことを挙げている。漢文に対して日本の古典であるという意識を持ってもらいたいため、学生は昔の日本人の中国文学に対する態度を少しでも味わうことができたのではないかと思う。

⑪では、漢文に対して各人が色々な考えをしていることが分かる。日本人として漢文を読む場合の困難を実感してくれている。

⑫では、予習についてその大変さを指摘する学生が多くいた。高校生の受動的な授業とは違い、教員になってからは自発的に作業を行うことが求められる。こうした作業を身につけておくことで、教員になってから活きてくることだと思われる。また討論についての指摘も多く見られた。楽しむことができた学生とあまりできなかった学生がいた。ただし、あまり討論できなかった学生も、討論の必要性を感じているようであり、やめてほしいという学生はいなかった。

この授業は主として国語教育専修の学生と国際理解教育コースの学生が受けている。将来の目的に応じて、国語教育専修の学生には作品をとことん追究する姿勢を養ってほしく、国際理解教育コースの学生には、日本における中国文学の受容を感じ、作品を楽しんでほしいと考えている。そうした意図があるため、与える課題に若干の差異をもうけたが、一部の学生にとっては不服であったことも窺える。この点については今後の課題である。